

L'aile d'Howl



【ライル・ドウル:ホウルの翼(仏語)】

May & June 2015

祝日本一☆日本国内最長の28時間ハンドボールゲーム達成!!

ついに偉業達成! GW最終日となった5月5日から翌6日にかけて、花巻市総合体育館アネックスにて「28時間耐久ハンドボールゲーム~Love for handball never ends~ ハンドボールが楽しすぎて気がいたら28時間スペシャル」が開催され、岩手県内外から集結した総勢947名のハンドボールファンがノンストップで28時間プレーし続け、ついに日本国内最長記録を樹立しました!



朝8時半からオープニングセレモニーが始まり、菅原心人くん(花巻クラブジュニアキャプテン)の元気な選手宣誓に続き、東北兼岩手県ハンドボール協会会長の小友正人先生のスローオフによって、ついに28時間へのチャレンジが幕を開けました。最初は岩手県内の少年団が混成チームとなり、低学年~高学年まで順番にコートに立ってプレーを行いました。途切れることなくプレーを続ける合間に選手交代を繰り返し、ボールをつないでいきました。

小学生に続いてコートに立ったのはなんと車椅子ハンドボールの選手たち。車椅子ハンドの全国大会で8連覇を目指しているという強豪・宮城フェニックスの皆さんが試合を行い、続いて岩手県の一般男女の選手たちが、岩手県では初めてとなる車椅子ハンドに挑戦しました。私編集長も参加させていただきましたが、最初は車椅子の扱いがとても難しく、移動するのもままならない状態でしたが、次第にコントロールできるようになり、シュートも決めることができました。車椅子を扱いながらボールをハンドリングするのはとても難しかったです、実際にやってみてとても楽しかったです。

さて、午後に入り、今度は高校生にバトンタッチ。不来方高校や花巻北高校など普段は火花を散らすチーム同士でも、互いに声援を送りつつ、リラックスした雰囲気の中でハンドボールを楽しんでいました。ボーナス点を目指して、果敢にスカイプレーにチャレンジする高校生もたくさんいました。また、今回千葉県立国府台高校から4名、そしてお隣の秋田県大曲農業からも選手たちが駆けつけてくれました。今度は全国大会などの舞台で再会できると嬉しいですね。午後の部は、高校女子がその後を引き継ぎ、自分たちで場内アナウンスもこなしながら、18時半頃に一般の部へ襷をつなぎました。

北東北インターハイ、全日本インカレ、全国高校選抜大会と、これまで数々の大きな大会を開催し、ハンドボール界でもその名が知られるようになった岩手県花巻市。いよいよ希望郷いわて国体を来年に控えた今、PRのために花巻市協会がついに実現に動いたのが「日本最長」試合。平成28年度開催のいわて国体にちなんで28時間という時間設定とし、選手交代が自由にできるハンドボールならではの特性を活かしてノンストップでボールをつないでいくというこの突拍子もないイベントは、2015年5月5日午前9時、ついにスローオフのときを迎えた。



参加者は小学生から71歳まで、計947名(うち69名が当日飛び入り参加)。遠くは兵庫県や愛知県から、また千葉県から参加してくれた高校生たちもいた。「チームそばっち」と「チームフラワーロールちゃん」の2つに分かれ、年代別カテゴリー順に次々と選手交代を繰り返しながら試合を続けた。

また、お楽しみ企画として、国体支援募金、東日本大震災復興募金等にご協力いただいた方が応募することでできる「総得点予想クイズ」や、世界のハンドボール映像を観ることができるパブリックビューイングスペースの他、日本代表チームや海外で活躍する日本人プレーヤーへのメッセージを日の丸に書き込む東京オリンピック応援企画なども並行して実施され、会場に彩を添えた。

真夜中の時間帯をいかに乗り切るかということが、当初一番の懸念ではありましたが、そのような心配は全くの杞



憂に終わりました。なぜか深夜を回っても試合のテンションがほとんど落ちないのです！むしろ、ボーナスポイントを狙って果敢にスカイプレーにチャレンジするなど、参加者が思い思いにプレーを楽しんでいました。普段決して深夜に明かりが点くことはない体育館が、暗闇に煌々とした姿を見せる様はまさに「ハンドボールの不夜城」であっただろうと思います。一般男女の参加者は、ほとんどが徹夜状態でありながらも、自分の出番を待つ間にかつてのチームメイトやライバルと旧交を温め合い、コートで繰り広げられる仲間のハッスルプレーに声援を送り続けていました。また、コートサイドのベンチを順繰りに詰めながら、深夜にも関わらずマナー良く順番を待つ姿も、見ていて非常に気持ちが良いものでありました。また、宮城県に拠点を置く実業団チーム「トヨタ自動車東日本」から4名が突然の来場。日本代表候補を含む国内トップリーグからの参加という嬉しいサプライズもあり、会場は無気力試合とは全く縁のないテンションのまま、楽しい時間だけが過ぎていきました。こうして、「非日常」を満喫した社会人ハンドボーラーは、朝日とともに

会場入りした中学生たちに、無事禪をつなぎました。

ようやく28時間のゴールが見え始めたゲームは、気が付けば1点を争う接戦となっていました。ラスト1時間は花巻市国体実行委員会やハンドボール協会関係者がコートに立ち、オール中学生との真剣勝負に突入しました。さて、「チームそばっち」が1点リードして迎えた試合終了間際、ここでレジェンドが登場。花巻市出身の左腕・谷川富男さんが、かつて実業団でプレーした現役時代を彷彿とさせる豪快なシュートを決め、ゲーム終了。シニア得点によるボーナスポイントが追加され、「チームフラワーロールちゃん」が劇的な逆転勝利を収めました。957-956、総得点数1913点という、まさに「あり得ない」試合は、5月6日午後1時、参加者みんなの笑顔と共に幕を閉じました。

その後、総得点予想クイズによる景品抽選会などが行われ、閉会式は和やかな雰囲気で行われました。

「楽しいことをやるのに、時間制限を設ける必要はないんだな、と改めて思いました」— ゲーム終了後、中島昭博氏（花巻市協会副会長）はこう語りました。本イベントの副題にもあるように、「ハンドボールが楽しすぎて気がついたら28時間」をまさに体現したからこその一言であったように思います。現在ギネスブックに登録されているハンドボールの最長試合は、過去にオランダで記録された70時間。挑戦することを想像するともうすごく恐ろしいですが、やれるのではないかとひそかに期待してしまうのはなぜでしょう？そう思わせてくれるのは、今回参加してくれた皆さんのおかげだと思いますし、やはり岩手ハンドボールの団結力と底力があるからだと思います。花巻市の名がギネスブックに登場する日は、そう遠くないかもしれません！



男子・花巻北高、女子・花巻南高が県高総体で久々の決勝進出！

5月29日～31日まで、花巻市総合体育館及び市民体育館を会場に行われた、第67回岩手県高校総体において、地元花巻市の高校が男女揃って決勝に進出するという久しぶりの快挙を成し遂げました。惜しくも県の頂点に立つことはできませんでしたが、まさに四半世紀ぶりに花巻の高校が最後まで勝ち進んだという今回の結果は、今後に大きな希望と期待を持たせてくれるものであります。



男子・花巻北高は、けがで外れていた主力選手が復帰し、今大会に臨みました。初戦の一関高専戦を30-12で危なげなく勝利すると、続く盛岡中央との試合でも前半からリードを広げ、10点差以上をつけて準決勝に勝ち進みます。迎えた準決勝は、春の全国高校選抜大会に出場した盛岡四高との対戦。さすがに全国の舞台を経験したチーム相手に序盤は苦戦し、10-10の同点で折り返しますが、後半なんとか1点を勝ち越した花巻北はついに決勝の舞台へ！現在、母校である花巻北高を率いる齋藤崇先生が高校生時代に決勝進出した以来、まさに27年もの時を経て、ようやく県のトップを狙える位置に戻ってきました。その久しぶりとなる決勝戦では、王者・不来方高に必死で食い下がり、前半はなんとか4点差で折り返しましたが、後半徐々にリードを離され、26-14でゲーム終了。惜しくも優勝は逃しましたが、地元高校の快進撃に、会場である花巻市総合体育館も大いに盛り上がりました。なお、チーム唯一の3年生として最後まで頑張った

阿部紘大選手、そして小学生ハンドボール教室での出会いから高校で本格的にハンドボール競技を開始した高橋友朗選手が、優秀選手として選出されました。

女子・花巻南は、初戦の大きな山場である盛岡南戦を 17-13 で勝利し、続く水沢高を大差で退けると、準決勝では昨年の女王・盛岡白百合との対戦を迎えました。前半を 11-9 の 2 点差で折り返すと、後半はなんとかそのリードを死守して 22-20 で勝利。白百合の 3 年連続決勝進出を阻止し、花巻南が久しぶりにファイナルゲームに残りました。決勝では、こちらも王座奪還に向けて全力をかける不来方高校との顔合わせとなりました。前半はどちらに転ぶか分からない展開で、不来方が 3 点リードして後半に突入しました。必死に食い下がる花巻南でしたが、徐々に地力の差が出て、20-13 で試合終了のホイッスル。不来方高が 3 年ぶり 11 回目の優勝を果たし、残念ながら花巻勢の優勝は今回叶いませんでしたが、男子同様大きな期待を抱かせてくれる結果となりました。花巻南のゴールを死守した藤原紗夏 GK、2 年生ながらゲームメイクでチームを牽引した岡本文子選手が優秀選手に選ばれました。

齋藤崇監督、小川至門監督が赴任以降、両校は着実に力をつけています。今後の成長にも注目していきたいと思います。



Jクイックハンドボールについて考える～小学生ハンドボールの変革～

5 月 31 日、東京都味の素ナショナルトレーニングセンターで開催された Jクイックハンドボール講習会及び小学生ハンドボール推進会議に、私編集長は岩手県代表として参加してきました。Jクイックハンドボールとは、1 対 1 など個の力や判断力、応用力の強化等を目的として、小学生ハンドボールのルールを改訂し、より展開の早いスピーディーな試合となるよう変更を行ったものです。大きな変更点を具体的に説明すると、①得点後の試合再開はゴールスローから ②9M ラインの外で、ボールを奪うことを前提とした積極的な DF を行うこと(努力事項であり罰則なし) ③競技時間は各 10 分の 3 セット制とする(それぞれ 5 分の休憩をはさむ) というもの。当日の講習会では、講義の他、東京都内の少年団によるデモンストレーションも行われました。その中で考えたこと、感じたことを以下に記載します(あくまで編集長の個人的意見ですので、ご意見ご感想等いただければ幸いです)

まず、子どもたちの総合的機動力+判断力を向上する目的において、紹介された練習内容は、普段の練習に取り入れるものとしては役に立つと思いましたが、ただし実際の試合では、チームのレベルにも大きく左右されると思います。指導者の想定している形にならないケースが多く見受けられましたので、果たしてルールを変更して試合形式もこのようにする利点があるのだろうか、という疑問が多く残りました。例えば、① 各チームに動ける(走れる)選手が 2~3 人いれば、そのメンバーだけで試合ができてしまいます。実際、デモゲーム中に一度もボールに触らずに終わった子どもが何人もいました。その子たちはひたすらコートを往復ダッシュしているだけです。これは「子どもたちの笑顔のために」ハンドボールを指導するという私たちの理念に反するのではないかと考えます。試合で点数が取れないから、あるいはゲーム展開に絡めないからハンドボールがつまらない、と思ってしまう子どもたちが出てこないか心配になります。また、② 空間に走り込んでシュートを狙うことは良いことですが、そのためにシュートはほとんどがゴールエリア付近からの走り込むシュートとなり、サイドシュート、ポストシュート、ロングシュートなどのバリエーションが生まれなくなります。つまり、縦横無尽にコートを動くのは良いことですが、もはやポジションの概念がなくなってしまう。(小学生のうちにポジションを固定しない、あるいは難しいシュートは教えなくてもいい、というのなら話は別ですが)

上記の他、東北での試合においては、(特にオールコートマンツーマン DF を敷かれたとき) (1) GK からボールが出せない (2) GK からのパスを即座にカットされるため、このボールをフロントコートに運ぶことすらままならないというチームも見受けられました。このような状況は、練習を重ねることによって改善される、また、オールコートマンツーマン DF を試合中ずっと通じてできるチームはない(だろう)という指導者側の想定はあるものの、チームレベルによっては大人の思惑どおりにいかないことが多いのも小学生部門の特徴であるため、これから実際に運用しながら様子を観察し、ルールや試合形式の見直しも随時行っていくという姿勢が必要なのではないかと考えた次第です。

最近、バスケットボールでも 15 歳以下のゾーン DF を禁止する、という発表がありました。バスケットボール協会側は、これはオリンピック出場を目標とした強化策の一環としての位置づけであります。日本ハンドボール協会は、今回の Jクイックハンドボールはあくまで「発達期に応じた楽しいボールゲームを実現し、さらに個の力を向上する」ことを目的としたものであり、「活発で楽しいハンドボールが広まる」ことを目標としています。私たちが子どもたちに指導する中で最も大切なことは、子どもたちがハンドボールの楽しさを知り、プレーの中で喜びや達成感を感じながら成長することを助けることだと思います。その実現が目指せる内容に少しでも近づけるよう、ベストな方法を常に模索していきたいと思ひます。

L'aile d'Howl (ライル・ドウル)
2015 年 5・6 月合併号
2015 年 6 月 25 日 発行
発行: 花巻市ハンドボール協会